

現地インタビュー

カルビーポテト

田崎一也社長



今年の収穫予想について田崎社長は、「極端な長雨などがなければかなり良くなるのではないかと。直近の今週の報告では昨年は108%ぐらいだったが、今年は前年並みであれば大豊作。昨年は25万トンだったが、その前の3年間は22〜

省力化・省人化で馬鈴しょ生産をサポート

【北海道・幕別町】日本の農作物の大生産地、北海道で馬鈴しょの収穫が本格化する。国内生産量の80%強の181万9000トン(令和4年産・農水省調)を生産、そのうちポテトチップス、ポテトサラダ向けの加工用は57万8500トンに上る。加工食品、とりわけポテトチップスは北海道産の収穫状況により、来年初春先までの生産・供給が決まる。しかし、近年は夏場の高温や局地的な豪雨など温暖化に伴う天候不住により、生産への影響が出ている。さらに、生産者の高齢化や、生産現場へも働き方改革が問われるようにな

り、IoTなどDX導入も急がれている。カルビーグループは、年間で約37万トンの加工用馬鈴しょを使用、そのうち北海道産で22〜23万トンを使用する国内最大のユーザー。生の馬鈴しょは期間限定で年間数万トンの輸入が許可されているが、ポテトチップスは植物防疫法で国内産を使用せざるをえない。スナック菓子最大手の取り組みについて、原料調達を一手に担うカルビーポテトの田崎一也社長(写真)に、今年の北海道加工用馬鈴しょの見通し、加工用馬鈴しょを取り巻く様々な問題を聞いた。

道内最大級の幕別貯蔵庫が稼働

23万トンだったので、2万トンプラスになるのは非常に大きい。カルビーで1日に使用する量は約1000トンで20日分は約1000トンで、増量セールなど消費者還元、新商品販売につながる。量が少ないと出荷をコントロールしなければならぬが、前年並みの作柄であれば思い切って販売で来る状態になる。ただ、少し干ばつ傾向なので、全道全品種でみると比重については、猛暑の影響もあり、少し懸念している」と説明した。

干ばつは病虫害の発生につながり易い。特に、馬鈴しょはシストセンチュウに

悩まされる。「これをなくすには病気に対して抵抗性を持つている品種を広げていくこと。カルビーポテトが開発した「ぼろしり」など抵抗性のある品種を徐々に種芋を増やしながら、生産者に提供できるようにしていかなければいけない」と話し、新品種も3年後ぐらいに出せる予定だという。「トヨシロの後継品種も育成を進めている。シストセンチュウ抵抗性があるので生産者には安心して使っていただけ。トヨシロとスノーデンの後継品種で、2028年には1万5

000トンから2万トンの生産できればいいかなと思っ



幕別貯蔵庫

000トンから2万トンの生産できればいいかなと思っ

も変化が出ている。大量の北海道産は春先までの長期保存。産地切り替えとなる県産の馬鈴しょ収穫・出荷が始まる5月過ぎまで持たせる必要がある。しかし、北海道も9、10月でも高温が続くため、新設した幕別貯蔵庫には冷凍機を設置。「貯蔵庫のうち3割ぐらいは設置しており、順次入れていくことになる。良い品質の馬鈴薯を提供するために投資は必要になるので、待たなしてやっていきたい。」

さらに、生産者の高齢化に伴い働

き方改革が農業現場でも問われ、省力化・省人化にも積極的に取り組む。その一つが無選別のテストだ。田崎社長は「北海道の数カ所で行っている。実際にハーベスターを少人数だけで、どのような問題が起きるか確認しながら進めている。最終的には貯蔵庫でも選別するが、カルビーの工場でも洗浄し選別してもらうことも考えている。生産者は、土塊や石ころなど心配される方がいるので、(ハーベスター上に)最低一人はつくなど、少しでも減らしていくことで、北海道全体では省人化につながっていくので進めていきたい」と話した。

〈十勝では5カ所目の大型貯蔵庫〉

4月に北海道・幕別町完成した馬鈴しょ貯蔵庫は、1000トン保管できるスペースを10室持つ、最大1万トンの馬鈴しょを保管できる北海道最大級の貯蔵庫。幕別町での今年の馬鈴しょ受け入れは、1万5000トンを見込む。これに伴い、同社は幕別支所を



貯蔵庫内部屋

き方改革が農業現場でも問われ、省力化・省人化にも積極的に取り組む。その一つが無選別のテストだ。田崎社長は「北海道の数カ所で行っている。実際にハーベスターを少人数だけで、どのような問題が起きるか確認しながら進めている。最終的には貯蔵庫でも選別するが、カルビーの工場でも洗浄し選別してもらうことも考えている。生産者は、土塊や石ころなど心配される方がいるので、(ハーベスター上に)最低一人はつくなど、少しでも減らしていくことで、北海道全体では省人化につながっていくので進めていきたい」と話した。



選別機

開設。フィールドマンを配置し、馬鈴薯の受け入れや収穫の際のアドバイスを行う。
幕別貯蔵庫は、8月5日から稼働、ピークの9月から10月初めまで1日1300トンの馬鈴しょを受け入れる。9〜10月の高温に対応するため冷凍機を装備し温度管理を行い、最長翌年5月まで保管・管理する。
また、生産者の省力化・省人化を行うため、バラ積み馬鈴しょを受け入れ、最新鋭の選別機により貯蔵庫で選別。ダンプで搬入された馬鈴しょを1時間で300トン、1日では3000トン処理し、コンテナへ仕分け。仕分け後は約17℃に温度管理された貯蔵庫で保管。主に、各務原工場(岐阜県)・湖南工場(滋賀県)へ出荷、ポテトチップスが生産される。



8月清涼飲料市場2%増

南海トラフ情報や台風でMW特需

は値上げが一巡したSOT缶は安定したが、台風の影響大きく。「伊右衛門」5%減(2%減)、「グリーンダカラ」5%減(4%減)はともにも本体大容量の値上げによるもの。トクホ・機能性表示食品

【コカ・コーラシテム】全体4%増(2%増)。フルリニューアルした「綾鷹」は好調維持。容量戦略が奏功し、止渴需要も取り込む。「いろはす」は備蓄需要で大幅増(本紙推計)。
【サントリー】全体4%増(前年並み)。「天然水」17%増(5%増)で本体が大幅増。「きりっと果実」「レモンスカッシュ」も良い。「ボス」4%減(6%減)

2024年8月の清涼飲料市場は、数量ベースで前年比2%増(累計1%増)だった。
前年同月が4%増と高めのペースだったが、一部メーカーの稼働日増、猛暑による止渴需要のほか、南海トラフ地震の可能性が高まったとの情報や台風で防衛意識が高まり、ミネラルウォーターの備蓄需要が急増。最大ブランドのサントリー「天然水」が2割に迫る勢いで、他の有力ブランドも続いた。一方、他のカテゴリーは低調が目立ち、台風による屋

社名	8月	1~8月
コカ・コーラ	※104	※102
サントリー	104	100
アサヒ	100	99
伊藤園	※104	※100
キリン	101	107
大塚	93	100
ダイドー	※98	※92
ポッカサッポロ	91	94
総市場	102	101

※は当社推計

計7%増(8%増)は「特茶」がけん引。
【アサヒ】全体前年並み(1%減)。「三ツ矢」3%増(4%増)で小型PET、「特濃」が好調。「ウイルクソン」8%増(2%増)は新製品「WILKINSON」ON GO テイスティアップルの寄与も。「カルピス」はストリート10%減(4%減)、「コンク」1%増(10%増)。「ワンダ」4%増(6%増)。「ココクの深味」好調。「十六茶」3%増(5%増)。「おいしい水」21%増(5%増)

外需要の低迷を踏まえても、物価高のマイナス影響は強まっているものと見られる。
今後は9、10月が残暑予測で止渴需要が期待できそうだが、8月が猛暑にも関わらず備蓄需要に依存したこと、前年も同様に残暑だったことを考えると、簡単にはいかないかもしれない。また、ペースは低いとは言えず前年9月1・5%増、10月3%増。10月は値上げもあり、先行き不透明感は増している。

の伸びが強い。ミネラルウォーターは国産製品が良く44%増(9%増)。果実は「もぐと」が純増で12%増(12%増)(本紙推計)。
【キリン】全体1%増(7%増)。

【伊藤園】全体4%増(前年並み)。日本茶は3%増(1%減)で「おいしいお茶」は「緑茶」「濃い茶」がけん引、「健康ミネラルむぎ茶」も増加。野菜は4%増(4%減)でトマト系が好調維持。コーヒードリンクは「ポトル缶3種が配荷増で12%増(2%増)、特に「キリマンジャロ」「無糖ラテ」

「午後の紅茶」1%減(5%増)は大型PET減少、前年新製品発売の裏返し。「生茶」4%増(21%増)は本体、「ほうじ煎茶」とも好調。「フアア」8%増(6%増)。プラス乳酸菌入り飲料9%減(7%増)で「おいしい免疫ケア」が好調だった一方、前年新製品発売の反動も。ミネラルウォーター37%増(27%増)、「トロピカーナ」36%減(26%減)。

大塚グループ全体7%減(前年並み)。「ポカリスエット」8%減(2%減)、「オロナミンC」4%減(5%増)、ウォーター類10%減(15%減)、「マッチ」2%減(7%増)。その他5%減(6%減)。
【ダイドー】全体2%減(8%減)。水と炭酸は好調。炭酸は「フリスクスパークリング」けん引、それ以外

の炭酸も堅調。SOT缶コーヒードリンクの影響は9月からの模様。
【ポッカサッポロ】全体9%減(6%減)。コーヒードリンク16%減。果汁1%減(7%増)、うちレモン前年並み(7%増)、「キレートレモン」2%増(10%増)。炭酸6%減(15%減)も「北海道富良野ホップ炭酸水」は順調。茶系8%減(5%減)は「北海道コーン茶」好調維持。水9%減(8%減)。

【記者の目】
前年同月が4%増と高ペースだったことに加え、猛暑が連年でアドバンテージにならないこと、断続的な値上げと市場環境は悪化しているため、プラスでの着地は予想外だったと言える。
ただ、ミネラルウォーターの備蓄特需によるところが大きかったのは事実であり、今後には不安が残る。ようやく実現した値上げ後の価格を維持しつつ、消費を拡大できるのか。コストの観点からは値上げは止めようがなく、各メーカーの施策に注目だ。
(石母田景)